



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究室報
Citation	独語独文学科研究年報, 15, 65-67
Issue Date	1989-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25781
Type	other
File Information	15_P65-67.pdf



研 究 室 報

講義題目 (昭和 63 年度)

学 部

独 語 学 概 論	植 木 迪 子
独文学史概説	青 柳 謙 二
独 語 学 (1) 中高ドイツ語	清 水 誠
独 語 学 (3) 古高ドイツ語	清 水 誠
独 語 学 ドイツ語の構造性・規則性・生成性	在 間 進
独 語 学 Deutschunterricht für Fortgeschrittene	Ulrich Beil
独 文 学 19 世紀ドイツ叙情詩の諸相	新 妻 篤
独 文 学 1.Die Wiener Gruppe und die Konkrete-Poesie	Johann Ortner
2.Die Dialekt-Unterschiede in Österreich	
独語学演習 (2) 独語学の基本	植 木 迪 子
独 文 学 演 習 Einige moderne Erzählungen und deren Interpretationen	青 柳 謙 二

大 学 院

独文学語学特殊講義 (2) Wernher der Gartenaere	清 水 誠
Meier Helmbrecht	
独語学演習 (1) Probleme der Lexikologie	植 木 迪 子
独文学演習 (2) Methodenprobleme der deutschen Literaturwissenschaft	青 柳 謙 二
独文学演習 (1) Die fremde Natur: Ausgewählte Texte der Romantik.	Ulrich Beil
独文学演習 (2) J.G.Herder : „ Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit“	Ulrich Beil
独文学演習 (3) Denken im Widerspruch: Zur Theorie und Geschichte der Aphoristik.	Ulrich Beil
独 文 学 演 習 Hohendahl : Geschichte der deutschen Literaturkritik.	石 原 次 郎

昭和 62 年度論文題目

卒業論文

塩 谷 幸 子:「敬語」に関する考察

丹 後 光紀子:ドイツ語習得と誤謬分析

－冠詞使用の際の留意点をめぐって－

北海道大学ドイツ語学・文学研究会会則

1. 本会は北海道大学ドイツ語学・文学研究会と称する。
2. 本会はドイツ語学・文学の発展に寄与することを目的とする。
3. 本会は上の目的達成のため下記の事業を行なう。
 - 1) 機関誌「独語独文学科研究年報」を毎年1回発行する。
 - 2) 合評会、研究会、講演会等を随時行なう。
4. 本会員は北海道大学文学部独語・独文学研究室の教官・院生(学生も含む)ならびにその趣旨に賛同する者によって構成される。
5. 本会員は上の活動の遂行のため所定の会費を支払う。
6. 本会は1名の会長と若干名の幹事をおく。幹事は会計および編集委員を兼任する。
7. 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日をもって終わる。
8. 本会の事務所は北海道大学文学部独語独文学研究室におく。
9. 本会に賛助会員をおく。

研究室行事記録

◎昭和 63 年 2 月 20 日に、昭和 62 年度卒業論文発表会が文学部 310 号室で行なわれた。

◎昭和 63 年には文学部で下記の研究会がもたれた。

・4 月 23 日 (419 号室)

海老塚 冬 衛:「日独語における数量詞遊離について」

田 中 慎:「視点とその言語的反映」

・6 月 25 日 (419 号室)

清 水 誠:「スウェーデン語について」

・7 月 12 日 (310 号室)

海老塚 冬 衛:「日独語における数量詞遊離について」

・7 月 13 日 (310 号室)

田 中 慎:「分裂文について」

・7 月 14 日 (310 号室)

最 上 英 明:「ドイツ語の心理的述語について」

・9 月 10 日 (419 号室)

江 口 豊:「bekommen - Passiv について」

< 研究発表 >

◎昭和 63 年には下記の研究会、ゼミナールで会員の発表が行なわれた。

・第 2 回 Mai - Seminar (五月ゼミナール) (5 月 16 日: コープイン渋谷)

名 執 基 樹:「構築主義的文芸理論について」

< 会員動向 >

◎昭和 63 年 1 月から 3 月まで清水誠氏及び中川勝昭氏が Schwäbisch-Hall の Goethe-Institut 講習に参加した。8 月には高橋修氏が、また 9 月には鈴木将史氏がそれぞれ München 大学から留学を終えて帰国した。

9 月には清水誠氏が Köln 大学へ、最上英明氏が München 大学へ、それぞれ留学のために出発した。

11 月には塩谷幸子氏が Staufen の Goethe-Institut 講習に参加のため出発した。

会 員 名 簿

◎青 柳 謙 二	石 川 克 知	石 橋 道 大	石 原 次 郎
伊 藤 祐紀子	岩 井 洋	岩 田 聡	植 木 進 子
梅 津 真	江 口 豊	海老塚 冬 衛	小 川 了
小 澤 幸 夫	加 藤 寛 蔵	川 島 淳 夫	川 東 雅 樹
岸 川 良 蔵	佐 藤 厚	佐 藤 修 子	佐 藤 俊 一
塩 谷 幸 子	※塩 谷 饒	清 水 誠	神 久 聡
○鈴 木 将 史	瀬 川 修 二	○高 橋 修	高 橋 吉 文
田 中 慎	田 中 剛	対 馬 晃	寺 田 龍 男
中 川 勝 昭	名 執 基 樹	西 川 智 之	藤 本 純 子
三 浦 國 泰	最 上 英 明	森 田 一 平	山 田 恵 子
山 田 善 久			

◎は会長

○は幹事

※は賛助会員

独語独文学科研究年報 第15号

1989年1月発行

発 行 者 北海道大学ドイツ語学・文学研究会

編集委員 鈴 木 将 史 高 橋 修

連絡先 北海道大学文学部独語独文学研究室内

060 札幌市北区北10条西7丁目

印刷所

北大印刷
